

ゲーテとケンペルの銀杏

—ゲーテの『植物のメタモルフォーゼ』論—

渡 邊 直 樹

はじめに

オランダ東インド株式会社の長崎・出島商館医師として1690年9月に来日し、2年後の1692年10月の終わりに帰国したドイツ人エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1716) は博物学 (Naturkunde) に通じていた。17世紀ヨーロッパでは医学は、人間の心身に係る病気の治療を目的とした。そのため医師には生物学や動物学ばかりでなく、薬を処方するため植物学にも十分な知識を有する総合的「知」が要求された。医師とは博物学的「知」を統合できる「学者」でなければならなかったのである。

このケンペルがスウェーデンのカール XI 世 (Karl XI, 1655-1697) が計画したペルシャ使節団の一行に加えられペルシャ・イスファハンにおいてその職務を果たし、その後オランダ東インド会社の医師の職を得てインド、セイロン、ジャワ、バタヴィア、シヤムを経由して日本までやってくる。この途次、また日本滞在中に蒐集・スケッチした、ヨーロッパには存在しない植物、「葉草」あるいは「本草」の種類と数は多く、その大部分は彼の記録である『廻国奇観』 (Amoenitatum exoticarum, 1712) に掲載された。

この中にケンペルが帰国する際に日本からとももに持って帰ったのか、あるいは日本滞在中に手に入れた『訓蒙図彙』 (1666) に従って紹介したものか、ヨーロッパでその後不思議な「神話」となる「銀杏」 (Ginkgo, Itsjo) がある。ケンペルは「ぎんなん」 (Ginau) とも読んでいる。

ケンペルは「ぎんなん」あるいはイチヨウとも紹介し、また、現代の漢字の読み方に従うと Ginkjo・Ginkyo (ぎんきょう) であるはずが Ginkgo と綴った。このことについて、判読者による g と y の読み違い説や言語学者としてのケンペル説、あるいは当時の音便説などがあり、いま

だ結論が出ていない。近年のケンペル著作集の編纂者であるミヒエル博士によるとケンペルの筆跡の特徴を詳細に調査分析した結果、y と g は厳密に区別されており判読者説は排除できる、という。また、ノートでは Ginkjo, Ginkio とあるので、ケンペルの単純な標記上の誤りで Ginkgo と書いたのであろうと結論づけている¹。しかし、言語修得能力に特別に優れ、多言語を我がものとしていたケンペルが単純なミスで、それも帰国後10数年もかけて編集した『廻国奇観』において犯すことはあり得るであろうか。音便上、より正確な表記を考慮した結果 Gink-go と綴ったという推測も成立するであろう。イチヨウの神秘である。

ヨーロッパ近代の自然科学の方法論である「分析」ではなく、いわゆる自然現象の観察による「総合」に重きを置いて原理・法則を追究したゲーテ (Johann Wolfgang Goethe, 1746-1832) は「形態学」 (Morphologie) を創始したが、その一環として「植物のメタモルフォーゼ」 (Metamorphose der Pflanzen, 1790) 論を展開した。その際、イチヨウの葉が先の方で二つに分かれている特徴に重要な理論的根拠を見出そうとした。同時に、「イチヨウの葉」 (Gingo biloba) という詩を創作し、『西東詩集』 (West-Ost Divan, 1819) に収録している。ゲーテは Gingo と綴った。

ゲーテはザクセン＝ヴァイマル公国の領主アウグスト公 (Karl August) の下で枢密顧問官として生涯をおくったが、このヴァイマルには、現在も「イチヨウ博物館」があり苗木やゲーテとイチヨウに因んだ品物が陳列され、売られている。詩人としてのゲーテを魅了し、あるいは「科学者」としてのゲーテを論争へと駆り立てた「金色」のイチヨウの葉は、ドイツにおいて一種特別な意義をもった。

本稿は、ドイツにおけるこのイチヨウをめぐる

神秘を介してゲーテの「形態学」と「植物学」に迫ろうとする試論である。

1 イチョウの名称

大槻文彦(1847-1928)編集による『大言海』(1982)は語源に遡り、語義を説明するところにおいて単に「言語辞典」を超えた「事典」的意義を有している。大槻博士は、なぜかこの『大言海』の序文にイチョウを取り上げている。あえてこの辞書の巻頭言にイチョウの語義を取り上げるほど、博士にとってこのイチョウは神秘であり、謎の多い説明がつかない多義的な「名前」であった。

もともと鎌倉時代に中国に学んだ僧が銀杏であるイチョウの実を携えて帰国し移植した。中国ではイチョウは「公孫樹」という名称であり、縁起の良い、子孫繁栄の樹木ということになっている。銀杏はその「実」の名称であった。日本でイチョウの名称が確立した経緯については謎であり、一説、葉が鴨の足に似ていることから、当時中国ではこの「木」が「イアチャオ」と呼ばれており、この発音が日本において「イチョウ」に転訛したと言われる。しかし、現在でもそうであるが、宋の時代の中国語の発音が統一的であったとは考えられずあて推量であろう。

ともあれ、中国に由来する「銀杏」という「実」の名称とその後、日本で生まれ、いわば字である「イチョウ」が流布することとなり、「実」と「樹木」に別々の名称が与えられた。大槻博士は多様な解説を提起しているものの、本当のところはやはり謎としている。

銀杏とイチョウの関係と似たような事例は「どんぐり」の実と「榎」の木など、樹木にある。梅にはないので、本来、外来種の樹木にこうした分化がみられるのであろうか。「実」が食糧として活用されるところもこれらの樹木に共通である。

ともあれ、Gingoであれ、Ginkgoであれ「ギンゴ」という名称がヨーロッパにおいて通用していることは、ケンペルがGinkgoをヨーロッパの地に始めて紹介したことに因ると考えてよい。ケンペルは持ち帰った江戸時代の『訓蒙図彙』のイチョウを『廻国奇観』でGinkgoと記したのである。

ゲーテはイチョウをGingo biloba という詩に詠んだが、その日本語訳は大抵「イチョウ」あ

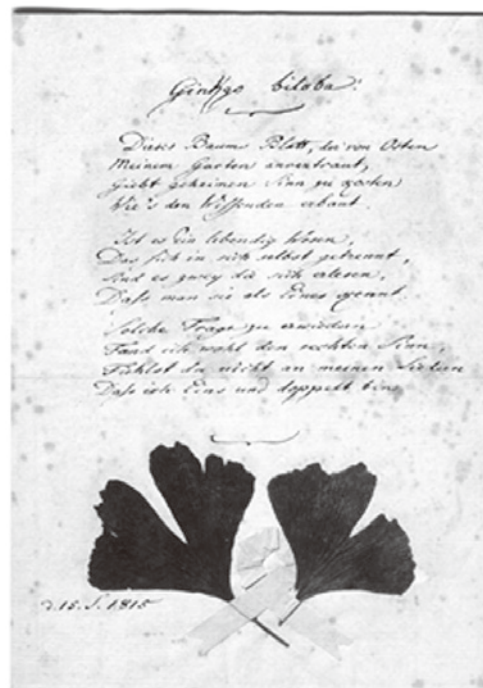
るいは「イチョウの葉」となっている。すくなくとも「銀杏(ぎんなん)」ではない。ゲーテはGinkgoを当然「樹木」(Ginkgo-Baum)の名称として理解していた、という前提でそう訳されているのであろう。ヨーロッパではイチョウではなくギンゴが木も実も含む名称として定着している。

さて、ゲーテの『イチョウの葉』の詩を紹介しよう。

東方から来てわたしの庭に
ゆだねられたこのギンゴの葉は、
秘密の意味を味わわせて
知者の心をよろこばす。

みずからのうちで二分かれした、
これは一つの生ける葉なのか？
一体として認められるほど
たがいに選びあった二つの存在なのか？

この問いの答えとして
正しい意味がみつかった、
わたしの詩を聞いてあなたは感じないのか、
わたしは一にして二重なのだと？²



(ヴァイマルのゲーテハウスの絵ハガキ、
Gingo bilobaの詩とイチョウの葉)

イチヨウが1700年頃東アジアからヨーロッパに伝わったとする認識をゲーテはもっていたが、「ギンゴの葉は秘密の味」を有し、「知者の心をよるこぼす」のである。葉の形を「一にして二重」と表現したことは多義的神秘的である。銀杏（ぎんなん）ではなく、イチヨウの葉がゲーテにとって重要な意味をもった。その葉は真ん中に深い切れ目があって二葉が同時に形成されたかのように見える。「一にして二重」とはゲーテの有機的自然観の象徴でもある。

1815年9月15日頃の作とみなされているこの詩は、ゲーテが「形態学」の原理を深化させていく時期と重なる。イチヨウの「秘密の味」を少しずつ解き明かすこと、味わうことが、いわゆる近代で定義するところの「科学」ではない、ゲーテが「うちたてようと考えた新しい科学³」、すなわち「ものの見方と方法に関して新しい⁴」「自然科学の一つ⁵」であるところの「形態学」の本質を開示してくれるはずである。

ゲーテの形態学と同様に自然の生物を考察しようとした者がいる。キールマイヤー (Carl Friedrich Kielmeyer, 1744-1865) やカールス (Carl Gustav Carus, 1789-1869)、フォン・ベア (Karl Ernst von Baer, 1792-1876) らは生命体を形態学の原理に基づく「形」・「展開」・「機能」という観点から理解しようとした。一方、植物学者は植物の「成長プラン」や「構造」などの「形」を重視した。また、マイヤー (Ernst Meyer, 1904-2005) やマルティウス (Karl Philipp von Martius, 1794-1868)、フォン・エーゼンベック (Johann Daniel Nees von Esenbeck, 1776-1858) は形態学を植物の学として、そしてそれを分析する方法論として推奨した。わけでもカールスはゲーテのいう植物のモルフォロジーをヒトの顎間骨 (Zwischenkieferknochen) の発見とともに最重要視している。

ゲーテの「植物のメタルフォーゼ」(Die Metamorphose der Pflanzen) は、1790年の春に四ツ折版32頁程度の印刷物として世に出た。文化史家の多くはドイツの自然科学の世紀の幕開けと呼んだが関心をもつ者は少なく、20年以上も経過した1817年になって長く絶版となっていたその2刷がようやく出ることになる。ヒトの「顎間骨」についても、ゲーテは1784年の秋にゼンメ

リング (Samuel Thomas Semmering, 1755-1830) やカムパー (Petrus Camper, 1722-89)、ブルーメンバハ (Johann Friedrich Blumenbach, 1752-1840) に草稿を送ったが、1830年になって初めて、しかもハレのレオポルディーナ・カロリーナ・アカデミー (Leopoldiner Karoliner Akademie) で印刷された。ゲーテの自然科学に関する断片やまとめの一部、日付のない手稿などから編まれた著作集が1900年頃にカリシャーとシュタイナーの編纂 (Kalischer und Steiner) によって出版されるのである。

ところで、フランスの啓蒙主義者であり、プロイセンのフリードリヒ二世 (Friedrich der Grosse, 1712-1786) の指南役でもあったヴォルテール (François-Marie Arouet, 1694-1778) も、一時期、自然科学研究に関心を持ち、物理の実験装置や実験室、暗室を用意している。1738年にはパリの科学アカデミーの懸賞課題に「火の本質と延焼」の研究をもって挑戦している。しかし、それは彼にとって単なるエピソードに過ぎない。彼の恋人であり、数学者でもあったシャトレ婦人 (Gabrielle Émilie Le Tonnelier de Breteuil, marquise du Châtelet, 1706-1749) や彼女の取り巻きたちはニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) やライブニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) の微積分、エネルギー保存の法則など時代のアクチュアルなテーマについて研究している。

17世紀から18世紀の合理主義者たちの誰もが「自然」をテーマとしてその謎を解き明かすことを大きな使命としていた。その方法論において物質の分析を使命としたにせよ、あるいは人間精神の理性の応用を使命としたにせよ。ただし、この両者の統合としての方法論的追究によって、ゲーテは物質と精神との間を媒介する第三の道である「形態学」を創始しようとしたのである。

ゲーテは『形態学』の「研究の意図」(Die Absicht eingeleitet, 1817) において、樹木は個体のようなものであるが、いくつもの個別部分から成立し、その部分が互いに同一で全体と類似している⁶、という。種子も個体部分の集合体であり、理念において同一であり、現象において類似すると見る⁷。ゲーテは「省察と忍従」(Bedenken und Ergebung, 1817) で理念と経験とは完全には一致しないが、類似する根拠としてカント (Immanuel

Kant,1724-1804) を引用する⁸。前者は時間と空間に同時に依存し結びつきを有するが、後者は分離している。従って、時間と空間が真を追究する重要な要素となる科学である自然研究の方法を適用し、理念と経験の性格と真理とを提起する場合には必ずしも真とは限らない、という自己矛盾に陥る可能性をゲーテは自覚していた。シラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller,1759-1805) との対話のなかでも明らかとなる、この理念と経験との不一致の可能性について、ゲーテは生命の動的本質、つまり生命の原点理念によって溶解を図る。原初的な生命が植物と動物に分化し、樹木と人間という完成に向かっていく。植物と動物のそれぞれ原型 (Typus) が、有機体の原則であるプラン (Baupläne) に従い、あるいはメタモルフォーゼにより形成されていく。

『色彩論』(Die Farbenlehre) において光と闇、明と暗が引力により人間の眼に色彩を感知させるように、感性と無色であるところの光を悟性を介し認識へと導く。ゲーテがいうところの分極性と高進性の作用のうちに、有機的生命もそのプランを完成へと導く。理念と経験との関係にも等しい認識作用の客観的証明は困難と考えるゲーテの自然科学の方法的姿勢は一貫している。むしろ、自然の二元論的存在を承認し、その差異を有機的生命体であるところの人間を介することにより本質が開示されるという方法においてゲーテのモルフォロジーが、いわゆる分析であるところの自然科学ではない学問体系としての自然に関する「学」として存在する意義がある。

自然を物質的把握、すなわち客観的分析による認識と、精神的把握、すなわち主観的観察による認識として分離するのではなく、両者の同時的存在と相互作用との結合であるところの高昇への欲求および索引と反発によりメタモルフォーゼする原型として確認する。この自然の「学」であるモルフォロジーは当初このように誕生した。

2 主観と客観との調和

そもそも、発見は偉大なものであれ、些細なものであれ偶然的要素に左右される。ジーゲン大学のマトゥセク (Peter Matussek) はゲーテのアペルシュ (Aperçu : ひらめき) について特に注目し

ている⁹。そして、この「ひらめき」が主観と客観との調和を証明するものであるとして、ガリレイ (Galileo Galilei, 1564-1642) の自然解釈に関する有機的主観的方法を引用している。アペルシュは連続性に因って、連続性をもたらす。いわばゲーテの総合的科学である Totalität の概念は、「ガリレイの多様な現象の運動の変化を考慮し、その一連の変化から規則性を追究する実験から法則が導き出される」と。さらに、ブレヒシュミット (Stefan Blechschmidt) の説明をもって補完している。

ゲーテの「ひらめき」についての認識理論的観点においては、観察者は自然を観察する中で、自然と同様に自分も生き生きと成長することを自覚する。電撃的に生じる「ひらめき」の瞬間に、観察者は自然の総体の意識に達し、その結果、諸現象の多様性の中で統一が生じる¹⁰。

自然研究は構成的でなければならず、観察—考察—思惟—結合へと向かう必要がある。個々の観察は、その行為においてすでに理論化しているといえる。つまり、直観と理論との原理的対立は、所与の対象の感性的受動的把握と所与の対象の構成的変形との間のそれではあり得ない。理念の知覚には精神の生産力が、理論と構成には精神の領域が必要であり、どちらがかけても十分とはいえないからである。

一方、ゲーテは根本現象をこう語っている。

根本現象がわれわれの感覚に露わになると、われわれは根本現象に一種気おくれを感じ不安さえ覚える。感覚的な人は驚いてしまう。しかし、すぐに活発な仲介者である悟性がやってきて、悟性独特の方法でこの最高に高貴なるものを、最高に卑俗なるものと結合させようとする¹¹。

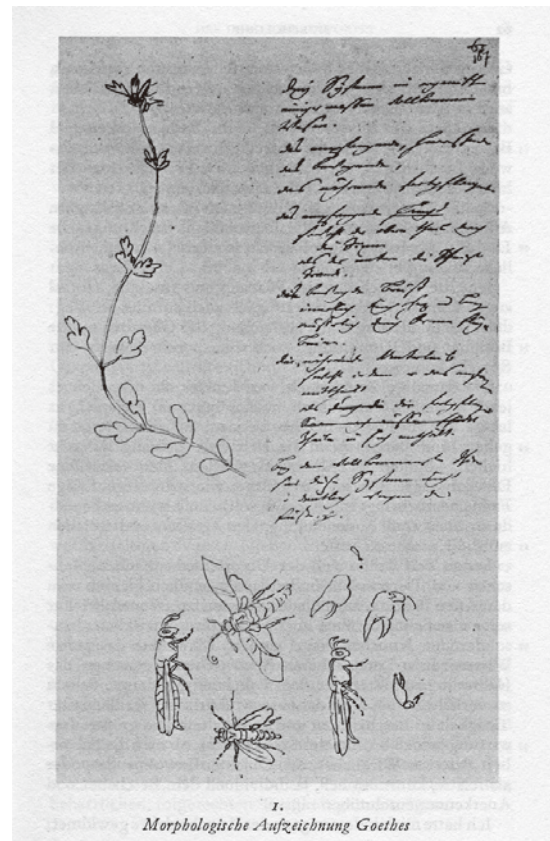
ゲーテは白色光を分解するニュートンの『光学』(Opticks, 1704) を誤りとして断罪し、人間の五感の作用に信頼を置く「人間自体が最も偉大かつ

正確な物理学的機械である¹²⁾ことを主張する。人工的計器によって自然の秘密を暴きたてようとする行為に対しては、真理は決してその姿を明らかにしようとはしない。自然と共有できる感性を有する人間だけがそれを感知できる。数字で決定される唯一絶対の真理ではなく、対峙する人間の数に相応する真理が存在する。人間が自然とともに生きる限りにおいて、現象の観察においてその真理が認知され得る。

これに対して、客体の現象を数理的定数により、特殊なものとして特徴づける方法は観察とは異なる新しい論理的性格を有する。つまり、何らかの量的な観点に基づいて比較可能として取り出せるものを意味する。物体の体積・温度・力学的エネルギー、熱・化学エネルギーは感性的把握ではなく、一般的理論を前提し確定される尺度であり、自然は数の総数に還元される。この数の全体が、物理学者にとっては客体としての事物である。しかし、この数・量の構造から排除されるものは規定不可能となる。

実験とは多数の条件により規定され、数と量の変化を追究するものである。ガリレイにおける特殊と普遍とは異なる別の思考形式がゲートには認められるのである。ゲートは理念ではなく、経験による「モデル」を提起することによって自然を考察し、理解しようとする。それは自然のなかには事実、存在するものではない「原像」(Urbild)である。この「原像」は、人間の現象界に存在する部分を超越する、真の意味での理念であり、その背後に何も探してはならず「現象そのものが理論¹³⁾」となる。現象は個別の部分のあらわれではなく、発生的連関のなかに把握されなければならない。しかし、抽象的であるのではなく、直観的確信であり、植物界に当てはめると「原植物」(Urpflanze)の理念となり、形象となる。この存在が自然研究者の観察により総合的に思惟できるのであり、数・量の分析的思惟は必要としない。

自然の連関の理念はゲート独自のモルフォロジーへと発展する。



(ゲートのスケッチによるモルフォロジーの展開¹⁴⁾)

生命体である動植物は根本において同一体であり、自然の光によって植物が、闇によって動物が完成するという説についても、あながち空想とばかりとはいえない。その過程において生産的組織により産出されたものが、生命なきものへ変化するという法則に従いメタモルフォーゼが始まり、展開していく、とゲートはいう。

3 数理物理学と質的把握

銀杏が「実」を、イチヨウがその「樹木」をそう一般に日本では言い表している。ケンペルが銅版画により紹介した Itsjo には、葉と実が描かれている。実は外皮が付いたままのものとそれを半分取り除き、中の朱色の実をのぞかせたものが描かれている。

『植物のメタモルフォーゼ』においては「超感覚的である原植物の感覚的形態を追究する¹⁵⁾」認識論が中心的考察課題である。その方法論とは「植物は初めから葉と、将来の芽とが分離することなく一体化している。そのため一方がなければ、もう一方は考察できない¹⁶⁾。」いわばシンメトリッ

クに形成されていく。従って、樹木の葉であれ、実であれ、形は違え、ゲーテが葉と呼ぶ基本組織に還元される。植物種に関連する枝は形態変化した葉にすぎないのである。

植物が芽を出し、花を咲かせ、実を結ぶ。これは同一の根源的器官が自然の指図（プラン）に従い様々変化した形態を採ることを意味する。莖から葉が拡張し、それが萼となって収縮し、また花弁となって拡張し、生殖器官となって収縮し、最後に果実となって拡張する¹⁷。ゲーテの二元論的思惟が自然全体の認識論的問題であることを、ヘルムライヒ（Christian Helmreich）は、ゲーテの『色彩論』とフンボルト（Alexander von Humboldt, 1769-1859）の『宇宙論』（Kosmos II）とを対比させつつ論じている。

ゲーテもフンボルトも普遍的な科学史を提示しようとしたのではない。彼らは扱う問題の前史を究めようとした。ゲーテにとって自然科学史の地平において、普遍的コンテクストのうちに色彩論を理解することが、一方、フンボルトにとって物質的世界観の歴史を自然全体の認識の歴史として、宇宙の力の作用として、人間の努力の現れとして理解することが問題であった¹⁸。

ゲーテの二元論は、この両極が分裂していることではなく、相互に引きつけ、また離れながらも最終的に合一に至ったとき、自然が真実の形となって現象し、それが人間により感知され得るといふ理論に他ならない。自然のうちに最も密に結びあい、自然のうちに分離していたもの全てを、人間が合一へと導き、それを保つのである¹⁹。自然の統一という思想は抽象的形成ではなく、葉が繁り、花が咲くという自然のダイナミックな法則を見出し形象化できるものなのである。

この理念と形象との関係を、イチヨウの葉は暗示している。葉の上方が二つに分かれ、莖に近いところで一つに結合している。

ゲーテによれば、知と直観は自然観察において植物の統一的把握に欠くことができないものである。この場合、統一とは多様な部分が統合され、ある個体となることによって生まれ、目に見え

る。例えば、現前するその多様な部分から形成されている具体的形態の同一性はいかに把握されるか、「種子のなかから展開させられるのか」それとも「初めにあたえられた生長の根源が法則に従って形成されつづけ、変形していくのか²⁰」というテーゼをゲーテ自ら立てる。原子論か力動論か、展開論か形成論か。ゲーテは後者の立場からメタモルフォーゼの理念を構築している。つまり、根本器官（Grundorgan）が段階を追い、完全かつ活動的器官へと変形し完成へ向かう。そして、最終的に有機体としての最高点、すなわち生殖と出生により、その全体から個体を分離する。この根本器官とは理念のうちにあることはいうまでもない。

根と葉と芽から形成されている植物は、この理念から考えると一つに結合されているものであり、このうち根と葉のどちらが欠けても植物の形態にはならない。ゲーテが自然現象を観察するときには、常に人間の感覚を媒介として総合的理解を目指すのと同じく、植物を統一体としてみなす際にも二元論的自然観はその重要な方法論となる。つまり、葉の芽は空中に展開し空気と光を、莖の芽は地中へと展開することによって湿度と闇とを得て自らを形成し完成へと向かう。光と闇、明と暗との両極が対立しつつ、メタモルフォーゼし、一つの統一体として植物の個体となる。

ゲーテは『詩と真実』（Dichtung und Wahrheit, 1832）において、ドルバック（Paul-Henri Thiry, baron d'Holbach, 1723-1789）の『自然の体系』（Système de la Nature, ou Des lois du monde physique & du monde moral, 1770）やラ・メトリ（Julien Offray de La Mettrie, 1709-1751）の『人間機械論』（L'homme-machine, 1747）における機械論的自然観が有する力学的原理の時代精神への影響を批判的に考察している。

それがいかに危険であるかをわれわれは理解しなかった。それは、われわれにとって灰色に暗く、死人のように思われた……物質は永遠性を有し、それに動かされ、この運動を介して左右へ、さらにあらゆる方向にただちに現存在の無限の現象を生み出すという訳だ。……彼は（ドルバック）はいくつかの一

般概念をくみだてながら、自然よりも高く、あるいはより高い自然として自然の内に現れるものを、物質的に運動しているだけで、方向も形姿もない自然に転化するため、同時にそれらを放棄してしまう。このことにより、事実多くのことを獲得したと思っているからである²¹。

百科全書派が、自然を無機的物質とみなし、神を無価値なものとして扱うことにより概念的公式をうち立てようとしたこと、これにゲーテは全く満足できなかった。彼らは啓蒙主義の合理主義の基本的前提を力学と数理物理学の原理において導入したに過ぎない、という。デカルトは、確かに力学の普遍妥当の原則を物質の世界において一般的認識に還元することにより、幾何学のみが明証性を有し、延長が明晰判明に把握可能な唯一のあらわれであると論理的に基礎づけたが、この幾何学の概念は自然一切に適用されるものではなく、完全に把握可能な現象に限定されている。幾何学的あるいは力学的根拠は、それが適用可能な自然現象の対概念しかその考察対象とはしていない。力学的に相互に結合し、また有価値的として規定し合っている存在の論理構造は、思惟の論理構造と調和しているように見えるに過ぎない。幾何学的力学的根拠は、現象一般の感覚的観念的それとはならない。なぜならば、自然現象は思惟そのものを必然的に内包しているからである。こうして論理的観念論は、自然科学的認識の外に追いやられ、唯物論的世界観だけが妥当するものとなった。ゲーテによれば、こうした「通俗的」自然観はどうしても受容できなかった。

ゲーテにとって、自然の解明しがたい問題は直観を容易にする形象としてのみ存在する。この形象は多元的部分から構成されているものではなく「生物の諸部分は生物自身に対して必然的な関係にあるものであり、たとえ諸部分が外へ向かって働きかけ、外部から規定を受けることがあっても、何か機械的なものがいわば外部によって組み立てられ、産み出されるわけではない²²。」ゲーテは物質と精神、外部と内部との間にいかなる対立も認めない。対立は原因を問い究明することに求められることを思えば、自然の問題は「どのように、

どこで、いつ」が問われても、「なぜ」は解明されてはならない。つまり、事実のままを説明するに留めておかなければならない。『色彩論』序論において強調されている人間の「眼」が神の力を宿しているように。

もし眼が太陽でなかったら、
どうしてわれわれは光を見ることができようか。

もし、われわれの内部に神みずからの力が宿っていなければ、

どうして神的なものがわれわれを歓喜させることができるだろうか²³。

原因と結果が数と量の関係に基礎づけられる物理学において、経験により知ることができる、また直観的に目で見ることができようような質的価値は排除される。ゲーテは個別を全体の連関のうちに位置づけることによって、その具体性と個性を保持できると考えた。換言すれば、普遍が特殊な形態を採るならば、特殊は存在し続ける。従って、感覚は数値的価値に代えられてならないし、排除されてはならない認識価値を有する、といわなければならない。人間は現実を語るにせよ、自然を語るにせよ、自己の感覚に基づき判断を下し、自己の本質とともに概念規定することになる。このように、人間と自然は相互に規定し、反発することによって存在の「真理」が呈示される。人間の感覚が事実、把握可能なかつ理解可能な唯一の意味を与えるのである。

ところで、ゲーテの、いわば生理学的自然認識は『色彩論』が示すように、個別部分の分析を目指すことではなかった。そうではなく、人間とともにある自然全体に関する新しい見方・方法論に彼の考察の中心があった。つまり、自然に関する新しく拡張される認識論が重要であり、事物に関する適切な形象を組み立てることが課題である。経験論的には個別の要素からの構成のうちに、合理論的には基本的特質から精神のうちにその真理は開示される。しかし、唯一の真理の認識は多様な根源・要素・方法から根源的「原型」との比較により帰納され、内的統一性を担保する。ちょうど、イタリア・シチリア島において「植物のあら

ゆる部分の根源的同一性 (ursprüngliche Identität) が完全に明白なものとなった²⁴」ように。ゲーテの直接的感性的把握は抽象的対象を問題としているのではなく、その全体が直観的全体との関連においてのみ追究される。従って、現象から条件へと至るのではなく、現象から「原型」、換言すれば「原現象」(Urphänomen) へとさかのぼる。ここにおいて、思惟と直観とが一致し、両者の活動は停止し原現象が真理となる。

一方、ゲーテにおける思惟は自然観察そのものの特質と等しいといえる。芸術家はそれぞれ独自の真理を持ち得る。自然現象あるいは対象は、そのまま模倣されるのではなく、それぞれの視覚の角度の下に、各々の特殊な認識方法がその対象を規定する。個々の考察方法に要求されるものは、客観的世界全体である「主観性」の領域に属し、数理物理学では計算不可能な秩序と帰結を有している。自然を比較的狭い意味でその特殊性において把握し、事実ではなく単なる問題の示唆に過ぎないようなゲーテの認識論は、しかしながら問題を解決した訳ではない。それは18世紀的分析科学の思想体系の課題として提起したという点において少なからぬ意義を有するといわなければならない。

ゲーテはヴァイマルの私邸の庭やヴァイマル近郊イェナだけでなく、旅行に出かけることによって植物研究に打ち込むが、その最も重要な旅行はイタリアであり、南イタリアが植物の形態に関して彼の洞察を深化させた。ドイツに比べ植物がはるかに多様であるイタリアの地で、そして、旅行の最終目的地であったシチリア島で「植物の根源的同一性」である「原植物」(Urpflanze) を「発見」することができた。いかに離れた地域であろうと、植物が近親性をもつという直観のうちに、「原植物」の理念は生まれた。「超感覚的な原植物」が感覚的に形としてゲーテに認識されたのである²⁵。シラーが「それは経験ではない。理念だ²⁶」と述べたとき、ゲーテがとっさに「理念が見えた」と応えたことは、経験を通して客体を、いわば「合理的理念」として把握する方法的信仰告白であったといえよう。

むすび

ゲーテは、経験により自然の内に植物のメタモルフォーゼを直観できる証左として *Ginkgo biloba* (イチョウの葉) という詩を書いた。そして、その葉に原植物である理念の形象化を見ようとした。ゲーテにとって、イチョウの一葉は「原型」から二葉に形成されつつあるメタモルフォーゼの経過を呈示するものに他ならなかった。

さて、*Itsjo* をめぐるゲーテとケンペルとの間にははたしていかなる関係があるのであろうか。少なくともゲーテが *Ginkgo* と綴ったことはドイツにおいてこの名称がすでに定着していたことを示すものといえる。そして、*Ginkgo* は、本来 *Ginkyo* であったかどうかの真偽がどうあれ、まさにケンペルが18世紀の初めにヨーロッパにもたらした名称に他ならない。この *Ginkgo* をゲーテがあらゆる植物を一つの概念へと還元できる「原型」とし、自己の形態学の象徴とみなしたことは、彼の著作のどこにもケンペルの名が見出されないとしても、おそらくゲーテの理念のうちにある「原植物」同様に、その記憶のうちに深く刻み込まれていたに違いない。

¹ Wolfgang Michel : On Engelbert Kaempfers „Ginkgo“. 2005. 九州大学学術情報データベース.

² 主たるテキストにはハンプルク版を使用した。以下巻号のみを表記する。Johann Wolfgang von Goethe-Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Band 2, Gedichte und Epen II. Textkritisch durchgesehen und kommentiert von Erich Trunz, München 1998. S.66.

³ Band 13, Naturwissenschaftliche Schriften. S.124.

⁴ Ebenda.

⁵ Ebenda.

⁶ Band 13, S.57.

⁷ Ebenda.

⁸ Ebenda, S.12.

⁹ ベーター・マトゥセク 『人間がたどりつく至上のもの』 -ゲーテの<ひらめき> - 『モルフォロギア』第37号、2011.

¹⁰ Stefan Blechschmidt: Goethes lebendiges Archiv. Mensch-Morphologie-Geschichte. Heidelberg 2009, S.185.

¹¹ Band 12, Schriften zur Kunst und Literatur, Maximen und Reflexionen. Textkritisch durchgesehen von Erich Trunz, Kommentiert von Herbert von Einem, S.367.

¹² Band 13, S.458.

¹³ Ebenda, S.432.

¹⁴ Band 13, S.61.

¹⁵ Gottfried Benn: Goethe und Naturwissenschaften. In: Goethe im zwanzigsten Jahrhundert. Hrsg.v.Hans Meyer. Frankfurt am Main, 1982, S.660.

- ¹⁶ Goethes Werke. Hrsg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. II. Abtheilung. 6. Band, S. 307.
- ¹⁷ Band 13, S. 100.
- ¹⁸ Christian Helmreich: Theorie und Geschichte der Naturwissenschaft bei Goethe und Alexander von Humboldt. In: Goethe-Jahrbuch 2007 (Band 124), Göttingen 2007. S. 169.
- ¹⁹ Band 13, S. 17f.
- ²⁰ Goethes Werke., a. a. O., S. 303.
- ²¹ Band 9, Autobiographische Schriften I. Textkritisch durchgesehen von Lieselotte Blumenthal, Kommentiert von Erich Trunz, S. 491.
- ²² Goethes Werke., a. a. O., S. 282.
- ²³ Band 13, S. 324.
- ²⁴ Ebenda., S. 164.
- ²⁵ Ebenda.
- ²⁶ Band 10, Autobiographische Schriften II, Textkritisch durchgesehen von Lieselotte Blumenthal und Waltraud Loos. Kommentiert von Waltraud Loos und Erich Trunz. S. 540.

(付記)

2013年5月22日から25日までヴァイマルで「第83回ゲーテ協会総会」が開催された。テーマはGoethe und Weltreligionenであった。

本稿はこの研究発表会から得られた成果に他ならない。

Ginkgo bei Goethe und Kaempfer

In bezug auf „die Metamorphose der Pflanzen“ von Goethe

WATANABE Naoki

Zusammenfassung

In dieser Arbeit handelt es sich um Goethes „Metamorphose der Pflanze“ in bezug auf Ginkgo. Goethe schrieb ein Gedicht „Gingo biloba“ im Jahre 1815 und das Gedicht wurde in „West-Ost Divan“(1819) veröffentlicht. Ginkgo-Baum soll von Engelbert Kaempfer am Anfang 18. Jahrhunderts in Europa mitgebracht worden sein. Nachdem Engelbert Kaempfer als Arzt der „Ost-Indischen Handelsgesellschaft von Holland“ in Deshima-Nagasaki Japans zwei Jahre von 1690 bis 92 geblieben war, ist er nicht nur mit vielen seltsamen Sachen, sondern auch mit vielen Aufzeichnungen der Pflanzen von Japan nach Europa zurückgekehrt, die es damals in Europa nicht gegeben hatte. Darin gab es auch Ginkgo-Baum. Eigentlich musste man das chinesische Schriftzeichen 銀杏 „Ging-kyo“ nennen, aber Kaempfer hat den Baum nicht „Gin-kyo“, sondern „Ginkgo“ buchstabiert. Zur Zeit gilt der Name „Ginkgo“ in Europa.

Das Blatt von „Ginkgo“ ininteressierte Goethe sehr. Ein Blatt von Ginkgo schien Goethe eine Gestaltung von zwei Blättern zu sein. Goethe hat erkannt, dass das Blatt also die Idee von seiner „Metamorphose“ am klarsten beweist. Seine Lehre von der Gestalt lautet, dass „eine Pflanze, ja ein Baum, die uns doch als Individuum erscheinen, aus lauter Einzelheiten bestehn, die sich untereinander und dem Ganzen gleich und ähnlich sind“. Goethes Meinung nach sollte die Naturgeschichte eigentlich die mannigfaltige Gestalt der organischen Wesen als ein bekanntes Phänomen ins Auge fassen. Die Morphologie soll die Lehre von der Gestalt, der Bildung und Umbildung der organischen Körper enthalten. Deshalb gehört sie zu den Naturwissenschaften.

In diesem Sinne hatte Ginkgo-Baum nicht nur für die Beiden, sondern auch für den europäischen Gedanken im 18. Jahrhundert eine besondere Bedeutung.

(2013年7月16日受理)